

## まえがき

今はビッグデータの全盛期である。コンピュータの性能が格段によくなり、一昔前は大型コンピュータでなければ処理できなかった膨大なデータが、今では手元の小さな端末で処理できるようになった。言語学もこのビッグデータに頼る研究が近年盛んになってきた。そういう研究分野があってももちろんよいと思う。しかし、私たちはそのような研究には与しない。いやむしろ、正反対の方向にあえて進んでいきたい。

というのも、そのような「おおざっぱ」な資料からでは、人間の言語の本質にはけっして到達できないと考えているからである。私たちの手元にあるほんのわずかな例文の中に、人間の言語の本質に迫る何かがありとあるはずだ。徒労になるかもしれないが、それでもかまわない。血眼になり、泥だらけになりながらもその「何か」を探し続けていきたい。

自分の内面をえぐり、自分の本性を探る作業はとても苦しい。これと同じように、母語の内面をえぐり、母語の本性を探る作業もまた苦しい。それでも、逃げることなく立ち向かわなければ人間の言語の本質を垣間見ることすらできない。本書は私たち3人の母語である日本語の内面をえぐり、日本語の本質を探ろうとしたドキュメンタリーである。膨大な先行研究を読み込んでから執筆したことはいうまでもないが、先行研究のバイアスを極力避けながら、自分たちの脳を使って真剣に考えた軌跡でもある。

生成文法に基づいて日本語を研究している研究者で、国語学の論文を綿密に読んでいる研究者は、そう多くはないのではないかと思うことがしばしばある。たとえば、国語学の大家の1人である橋本進吉が、チョムスキーが文を樹形図で表した時期よりはるか前に、文を同じような樹形図で表していることにどれくらいの研究者が気づいているだろうか。おそらくほとんどの研究者はそのことに気づいていないと思われる。とても残念なことである。

日本語文法の本質を本当に知りたいのであれば、生成文法や国語学などの垣根など取り払うべきだ。生成文法の知見と国語学での知見、そのほかの枠組みの知見をえり好みせず入手し、そしてそれらを利用して研究者自身の頭を使って考えることで、これまで誰も気づかなかったアイデアがたくさん

出てくるはずだ。そのアイデアのうち、どのアイデアが日本語文法の本質を表しているかを見極めるのには、さらなる探求が必要だろう。しかし、そのような飽くなき探求の連鎖がなければ日本語文法の本質には到達できない。

適量で良質な言語データを目の前に置き、これまでの先行研究で得られた経験を頭の中に準備して、研究者自身の頭で言語分析を行っていく。実験室は研究者自身の頭の中にあるのだから、高額な実験装置などはまったく必要ない。愚直に言語にぶつかっていけば、それでよい。言語の内面をえぐり出す、そんな勢いで。

読者には、本書を最初から最後まで一気に読んでいただきたい。そうすることで、日本語文法に体当たりするとはどういうことなのか、そして日本語の内面をえぐり出すとはどういうことなのか、きっとわかっていただけと思う。本書を読み終えたあと、「次は自分が日本語文法にぶつかっていく番だ」と思う人がいれば、私たちの役割は無事に終えることができる。日本語文法の研究は本当におもしろい。私たちのあとにぜひ続いてほしい。

畠山雄二・本田謙介・田中江扶

# 目次

まえがき.....	iii
-----------	-----

## 第 I 部 日本語文法の統語分析

<b>第 1 章 日本語の動詞重複構文.....</b>	<b>3</b>
1.1 はじめに.....	3
1.2 動詞重複構文の特徴と統語構造.....	4
1.2.1 動詞重複構文の特徴.....	4
1.2.2 動詞重複構文の統語構造.....	5
1.2.3 動詞重複構文は疑問文にはならない.....	7
1.2.4 動詞重複構文は「こと」で終わる命令文にはならない.....	10
1.2.5 動詞重複構文は関係節にはなれない.....	11
1.2.6 動詞重複構文は右方転移文に現れる.....	13
1.3 本分析の理論上の意義.....	14
1.4 おわりに.....	16
<b>第 2 章 日本語の代名詞「本人」.....</b>	<b>17</b>
2.1 はじめに.....	17
2.2 「本人」の統語条件.....	18
2.2.1 「自分」と「本人」の比較.....	18
2.2.2 反主語先行詞条件の妥当性.....	21
2.2.2.1 「本人」は主語ではないガ格名詞を指せるのか？.....	21
2.2.2.2 「本人」はガ格以外（つまり二格やノ格）の主語も指せないのか？.....	22
2.3 英語の（再帰）代名詞との比較.....	23
2.4 おわりに.....	25
補遺 使役構文について.....	26

<b>第3章 「放題」構文の統語構造</b> .....	29
3.1 はじめに.....	29
3.2 「放題」構文の特徴と統語構造.....	30
3.3 「放題」構文の統語構造の帰結.....	33
3.4 おわりに.....	36
<b>第4章 日本語の様態副詞と結果述語の統語論</b> .....	39
4.1 はじめに.....	39
4.2 様態副詞と結果述語の統語構造および反構成素統御条件.....	40
4.2.1 様態副詞と結果述語の統語構造.....	40
4.2.2 反構成素統御条件.....	42
4.3 おわりに.....	46
補遺 線形順序に基づく依存関係の制約.....	46
<b>第5章 日本語の「と」節と「ら」節の統語論</b> .....	49
5.1 はじめに.....	49
5.2 基本データと3つの特徴.....	49
5.3 3つの特徴に対する統語的分析.....	52
5.4 3つの特徴と英語.....	56
5.5 おわりに.....	62
<b>第6章 「先読み」規則の必要性—名詞句の義務的削除—</b> .....	65
6.1 はじめに.....	65
6.2 統語構造と束縛理論.....	66
6.3 おわりに.....	71
<b>第7章 逆接詞「るも」</b> .....	73
7.1 はじめに.....	73
7.2 逆接詞「るも」.....	74
7.2.1 「るも」の分布.....	74
7.2.2 形容詞+「るも」.....	77

7.2.3 補助動詞+「るも」.....	78
7.3 おわりに.....	80
<b>第8章 日本語の複数表現と不適正移動</b> .....	81
8.1 はじめに.....	81
8.2 日本語の複数表現.....	82
8.3 不適正移動の禁止.....	85
8.4 おわりに.....	88
<b>第II部 伝統文法と生成文法の架け橋</b>	
<b>第9章 橋本文法とミニマリスト・プログラム</b>	
一連文節の構造と最小句構造の類似性一.....	91
9.1 はじめに.....	91
9.2 句構造理論に関する橋本文法とミニマリストの類似性.....	93
9.3 「係り受け」とc統御.....	99
9.4 おわりに.....	102
<b>第10章 動詞語幹をつくる接辞rについて</b> .....	105
10.1 はじめに.....	105
10.2 動詞語幹をつくる接辞r.....	107
10.2.1 接辞r.....	107
10.2.2 子音動詞.....	108
10.2.3 rの造語力.....	109
10.3 おわりに.....	110
補遺 雨と雨戸.....	111
<b>第11章 形容詞語幹をつくる接辞kについて</b> .....	115
11.1 はじめに.....	115
11.2 形容詞語幹をつくる接辞k.....	116
11.2.1 接辞k.....	116

11.2.2	形容詞の現在形.....	117
11.2.3	k の造語力.....	118
11.3	動詞の語幹をつくる接辞 r との関連性.....	119
11.4	おわりに.....	120
補遺 1	「寒っ」の「っ」について.....	121
補遺 2	なぜ促音が語頭に現れないのか.....	125
<b>第 12 章</b>	<b>「イ脱落現象」再考.....</b>	<b>129</b>
12.1	はじめに.....	129
12.2	「飲んでく」の形態統語論.....	130
12.3	理論的意義.....	131
12.3.1	「ていく」→「てく」はイ脱落現象.....	131
12.3.2	イ脱落現象は単なる音声・音韻の現象ではない.....	133
12.4	おわりに.....	134
補遺	「ておく」と「とく」.....	135
<b>第 13 章</b>	<b>日本語の指示詞「こ」「そ」「あ」再考.....</b>	<b>139</b>
13.1	はじめに.....	139
13.2	「こ」「そ」「あ」の形態論的分析.....	140
13.2.1	《近》と《遠》の対立.....	140
13.2.2	《話し手》と《聞き手》の対立.....	140
13.2.3	「こ」「そ」「あ」の体系.....	142
13.3	おわりに.....	143
<b>第 14 章</b>	<b>連体詞「ある」と日本語の単数形.....</b>	<b>145</b>
14.1	はじめに.....	145
14.2	「ある」と単数形.....	146
14.3	「ある」と特定性.....	149
14.4	おわりに.....	151
補遺 1	3 種類の ar.....	152
補遺 2	「ある」と「いる」の選択について.....	154

<b>第15章 金田一(1950)再考</b> .....	159
15.1 はじめに.....	159
15.2 動詞の分類.....	160
15.2.1 動詞とアスペクト(「ている」と「かける」)の共起可能パターン... ..	160
15.2.2 始点・終点にかかわるアスペクト形式による分析.....	163
15.3 第四種の動詞に現れる「ている」.....	166
15.4 おわりに.....	169

### 第III部 日本語の構文

<b>第16章 使役を表す「受動文」</b> .....	173
16.1 はじめに.....	173
16.2 受動形態素「られ」.....	174
16.3 受動-使役交替のメカニズム.....	176
16.4 英語の受動文と日本語のラレル文.....	179
16.5 理論的帰結と今後の課題.....	182
16.6 おわりに.....	184
<b>第17章 「のなんの」構文の認可条件について</b> .....	187
17.1 はじめに.....	187
17.2 「のなんの」構文に課せられる諸条件.....	189
17.3 「のなんの」構文の認可条件.....	192
17.4 おわりに.....	195
<b>第18章 「何がXだ」構文</b> .....	197
18.1 はじめに.....	197
18.2 「何がXだ」構文の特性.....	198
18.2.1 意味的特性：否定を表す強調構文.....	198
18.2.2 統語的特性：分裂文との比較.....	200
18.3 おわりに.....	202

第 19 章 「方をする」構文と身体属性構文.....	205
19.1 はじめに.....	205
19.2 「方をする」構文と身体属性構文の共通の特性.....	206
19.2.1 「方をする」構文の特性.....	206
19.2.2 身体属性構文の特性.....	209
19.3 「方をする」構文と疑似身体属性構文.....	211
19.4 おわりに.....	214
第 20 章 英語の <i>to think that</i> 構文と日本語の「とは／なんて」構文.....	217
20.1 はじめに.....	217
20.2 <i>to think that</i> 構文の特徴.....	218
20.3 「とは／なんて」構文の特徴.....	222
20.4 おわりに.....	224
第 21 章 「この本は売れない」の曖昧性をめぐって.....	227
21.1 はじめに.....	227
21.2 「売れ」の構造.....	228
21.3 「ラ抜きことば」再考.....	232
21.4 おわりに.....	234
第 22 章 「酒を飲んで運転した」の曖昧性をめぐって.....	235
22.1 はじめに.....	235
22.2 「酒を飲んで運転した」のアスペクト的曖昧性.....	236
22.2.1 テ形節のアスペクト.....	236
22.2.2 曖昧性の消失.....	237
22.3 「酒を飲んで運転した」の統語的曖昧性.....	239
22.3.1 テ形節の統語的位置.....	239
22.3.2 曖昧性の消失.....	240
22.4 おわりに.....	242
補遺 「笑うように言った」の曖昧性.....	243



## 第IV部 日本語文法研究の継承

第23章 日本語の文法現象と第二言語習得	
一母語の文法を実感すること一	251
23.1 はじめに	251
23.2 知らないうちに頭の中に入っている文法	252
23.2.1 「い」省略現象	252
23.2.2 「自分」と「本人」	255
23.2.3 様態副詞と結果述語	257
23.2.4 23.2節のまとめ	262
23.3 変化する文法	263
23.3.1 こそあど言葉	263
23.3.1.1 《近》と《遠》の対立	264
23.3.1.2 《話し手》と《聞き手》の対立	265
23.3.1.3 「こ」「そ」「あ」の体系	265
23.3.2 「ら」抜き言葉	267
23.3.3 23.3節のまとめ	269
23.4 おわりに	269
補遺1 「れ」足す言葉	269
補遺2 2つの命令形 -ro と re-	270
補遺3 「だろう」と「ろう」	272
補遺4 「着る」と「切る」	275
補遺5 「食べるな」と「食べたな」	280
補遺6 「呼んでから入れ」と「呼んだから入れ」	289
補遺7 「する」サポート再考	292
補遺8 「ら」抜き言葉と命令形	298
あとがき	301
参考文献	303
索引	313
執筆者紹介	331

## 第 1 章

# 日本語の動詞重複構文\*

### 1.1 はじめに

日本語には (1) のように動詞を 2 度繰り返す表現がある。

- (1) a. バスが来た来た。  
 b. すごい、食べる食べる。

(1a) は、たとえば、バス停でバスの到着を待っていた話者が、バスが来るのが見えたときに言う文である。また、(1b) は、たとえば、育ち盛りの子どもが食事を大量に食べているのを、その子どもの親が見て、驚きながら言う文である。(1a) においては 2 つの「来た」が、(1b) においては 2 つの「食べる」が、それぞれ間に休止 (ポーズ) を入れることなく一息に発音される。本章では、(1a) や (1b) のように、1 つの文で動詞が 2 度繰り返される構文を「動詞重複構文」とよぶ。

日本語の動詞重複構文がどのような統語構造をしているのかについては、管見の限り、先行研究で詳しく議論されたことはなかった。本章ではいくつかの経験的なデータに基づいて、動詞重複構文の統語構造を示す。概略を述べれば、動詞重複構文は一般的な文のサイズ、すなわち TP (Tense Phrase (時制辞句)) ではなく、TP より大きなサイズ、すなわち CP (Complementizer

---

\* 本章は Hatakeyama, Honda and Tanaka (2015) を改訂したものである。

## 第2章

# 日本語の代名詞「本人」\*

### 2.1 はじめに

日本語の「自分」は主語を指す(柴谷(1978)等参照)。このことを確認するために、まずは次の例をみてみよう。

(1) 太郎が花子から自分の財布を受け取った。

(1)の「自分の財布」とは「太郎の財布」であって「花子の財布」ではない。つまり(1)は、太郎が花子から受け取ったのは太郎自身の財布であることを表している。このように、「自分」は主語を指す。

では、次の例はどうだろうか。

(2) 太郎が花子から本人の財布を受け取った。

(2)では「本人」が使われているが、「本人の財布」とは誰の財布のことだろうか。(2)の「本人の財布」とは「花子の財布」であって「太郎の財布」ではない。つまり(2)は、太郎が花子から受け取ったのは花子の財布であることを表している。このように、「本人」は主語以外のものを指す。

本章では、これまで過去の研究でほとんど取り上げられてこなかった「本人」の特徴を明らかにし、「自分」と「本人」が主語を指せるかどうかとい

---

\* 本章は Hatakeyama, Honda and Tanaka (2018) を改訂したものである。

## 第3章

# 「放題」構文の統語構造\*

### 3.1 はじめに

Kishimoto (2006) は、(1) に現れるような「方」は「文を名詞化する接尾辞 (nominalizing suffix)」であると捉えている。

- (1) a. 女性のビールの飲み方  
b. 学生の本の読み方

Kishimoto (2006) によると、(1a) の「女性のビールの飲み方」は、「女性がビールを飲む」という文が「方」によって名詞化された表現であり、同様に、(1b) の「学生の本の読み方」は、「学生が本を読む」という文が「方」によって名詞化された表現である。(1a) や (1b) のように、「方」によって文が名詞化された構文を本章では便宜上《「方」構文》とよぶことにする。

「方」構文の重要な特徴として、(2a, b) のようにカ格やヲ格が現れてはいけないことが挙げられる。

- (2) a. \*女性がビールを飲み方 (cf. (1a))  
b. \*学生が本を読み方 (cf. (1b))

(2a) の「女性が」と「ビールを」は、(1a) の「女性の」と「ビールの」を

---

\* 本章は畠山・本田・田中 (2018a) を改訂したものである。

## 第4章

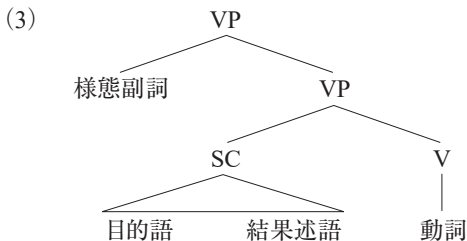
# 日本語の様態副詞と結果述語の統語論\*

### 4.1 はじめに

まず、(1)と(2)をみてみよう。

- (1) 雑に髪を赤く染めた。  
 (2) \*赤く雑に髪を染めた。

一般的に「雑に」のような副詞は《様態副詞》とよばれていて、「赤く」のような述語は《結果述語》とよばれている。(1)で示されているように、様態副詞と結果述語は共起が可能である。しかし、(2)のように語順を少し変えただけで文法的だった文が非文法的な文になってしまう。これはどうしてだろうか。本章では、(1)と(2)の文法性の違いを(3)の統語構造と(4)の条件によって説明する。



\* 本章は畠山・本田・田中(2021)を改訂したものである。

## 第5章

# 日本語の「と」節と「ら」節の統語論

### 5.1 はじめに

本章は、日本語の「と」や「ら」で終わる節（それぞれ「と」節と「ら」節とよぶ）について考察する。まず、5.2節で基本データを観察し、「と」節と「ら」節に関する特徴を3つ挙げる。つぎに、5.3節でその3つの特徴を統語的観点から分析する。さらに、5.4節でその3つの特徴がすべて英語にもみられることを示す。5.5節で本章をまとめる。

### 5.2 基本データと3つの特徴

日本語の「と」は、(1)や(2)のような環境に現れることがある。

- (1) [スイッチを押すと]思った。 [目的節]  
 (2) <スイッチを押すと>電気がついた。 <修飾節>

(1)の「スイッチを押すと」は動詞「思う」の[目的節 (complement)]である。「と」はこのように目的節の最後に生起することがある。一方、(2)の「スイッチを押すと」は動詞「(電気が)つく」の目的節ではなく、<修飾節 (adjunct)>である。<sup>1</sup>「と」はこのように修飾節の最後に生起することもあ

1 以降、日英語とも目的節は[]のカッコで囲み、修飾節は<>のカッコで囲むことにする。

## 第6章

# 「先読み」規則の必要性

## — 名詞句の義務的削除 —

### 6.1 はじめに

次の例文をみてみよう。

- (1) a. 餃子がうまいので、たくさん食べた。  
 b. 餃子を、うまいのでたくさん食べた。

(1a) と (1b) は基本的に同じ意味を表している。(1a) では「たくさん食べた」の直前に「餃子を」が省略されていると考えられる。一方、(1b) では「うまいので」の直前に「餃子が」が省略されていると考えられる。省略された要素を復元すると、(1a) と (1b) はそれぞれ (2a) と (2b) になる。

- (2) a. 餃子がうまいので、餃子をたくさん食べた。 (cf. (1a))  
 b. \*餃子を、餃子がうまいのでたくさん食べた。 (cf. (1b))

(2a) はいくらか冗長ではあるが完全に文法的なのに対し、(2b) は非文法的である。なぜ (1a) を元通りに復元した (2a) が文法的であるのに、(1b) を元通りに復元した (2b) は非文法的になるのだろうか。

本章は、(1) および (2) の統語構造を示した上で、(2b) の悪さは束縛理論 C (cf. Chomsky (1981)) の違反によるものと主張する。さらに、(1b) は、(2b) の「餃子が」が義務的に削除されてできた文であると主張する。

## 第7章

# 逆接詞「るも」

### 7.1 はじめに

(1) の読点前の文と読点後の文は逆接の関係にある。

(1) 大盛チャーハンを食べるも、まだお腹がすいていた。

(1) では、一見すると、文(「大盛チャーハンを食べる」)に逆接を表しているマーカー(便宜上「逆接詞」とよぶ)の「も」が後接して逆接の関係を表しているように見える。しかし、この考え方は妥当ではない。(2)をみてみよう。

(2) \*大盛チャーハンを食べたも、まだお腹がすいていた。

「も」が文に付くのであれば、(2)のような文(「大盛チャーハンを食べた」)の後ろに「も」が付いてもいいはずである。しかし、「も」を付けると、逆接を表すどころか非文法的な文になってしまう。このことから、(1)で逆接を表しているのは、「大盛チャーハンを食べるも」の「も」ではないことがわかる。本章では、(1)で逆接を表しているのは、「大盛チャーハンを食べるも」の「るも」であると主張する。つまり、(1)における逆接詞は「も」ではなく「るも」であると主張する。

7.2節では、まず逆接詞「るも」の分布を観察する。その結果、「るも」は逆接詞の「が」と相補分布をなすことを指摘する。つぎに、《形容詞+



## 第8章

# 日本語の複数表現と不適正移動

### 8.1 はじめに

日本語の指示代名詞「それ」と「それら」では、「それ」が単数のものを指し、「それら」が複数のものを指すことができる。しかし、「それ」は、必ずしも単数のものを指さなければならないというわけではない。たとえば、(1)のように「それ」は複数のものを指すこともできる。

- (1) コートを買ったが、ボタンが2個とれていた。そこでお店でそれをつけてもらった。(森山(2015: 341)太字は筆者による。以下同じ)

(1)の「それ」は「それら」で言い替えることももちろんできるが、森山でも指摘されているように、「それ」を使っても「ボタンが2個」という複数のものを指すことができる。一方、「それら」は単数のものを指すことはできない。たとえば(2)のように「ボタンが1つ」を「それら」で指すことはできない。

- (2) ボタンが1つとれていた。\*そこでお店でそれらをつけてもらった。

以上のことから、(3)のようにいうことができる。

- (3) 「それ」は単数のものも複数のものも指すことができるが、「それら」は複数のものしか指すことができない。

## 第9章

# 橋本文法とミニマリスト・プログラム

## 一連文節の構造と最小句構造の類似性—\*

### 9.1 はじめに

生成文法理論（以下「生成文法」とよぶ）では、自然言語の統語構造は2項枝分かれをした階層構造をもつと仮定されている。生成文法の最新版であるミニマリスト・プログラム（以下、「ミニマリスト」）では、従来の句構造理論であるX'理論を破棄し、併合（Merge）による下部から上部へ向けての構造の派生を提案している。生成文法では、「2項枝分かれ」「階層構造」「内心構造」「併合」「下部から上部へ向けての構造の派生」などの概念が導入されているが、これらの概念は実は生成文法が世に出るずっと前から国文法の研究の中で導入されていたのである。<sup>1</sup>

たとえば、橋本進吉は、昭和19年（1944年）9月3日の「文節による文の構造について」と題する講演の中で、「飛行機が空を飛ぶ」という文を（1）のように分析している（原文は縦書き）。<sup>2</sup>

\* 本章は畠山・本田・田中（2019）を改訂したものである。

1 生成文法は、Chomskyが1955年（出版年は1975年）に執筆したLogical Structure of Linguistic Theoryによって産声をあげたが、日本ではChomskyが1957年に出版したSyntactic Structuresを皮切りに広まっていった。

2 この講演の要旨（例文と樹形図を含む）は橋本（1953）にある。本章では、橋本（1944）で示された例文と樹形図を橋本（1953）から引用している。

## 第10章

# 動詞語幹をつくる接辞 r について

### 10.1 はじめに

いわゆる若者言葉の中には (1) や (2) のような動詞の例が多くみられる。

- (1) 告る (こくる)      (告白する)
- (2) パニクる      (パニックになる)

堀尾 (2008, 2022) は上のような動詞の例を大量に収集し、形態的および意味的な研究をしている。堀尾は (1) や (2) に現れる「る」を「他の品詞を動詞化する接辞」、すなわち《動詞化接辞》と捉えている。たとえば、(1) の「告る」は、「告白する」の「告」に動詞化接辞の「る」が後接してつくられたものであると考えている。また、(2) の「パニクる」は、「パニックになる」の「パニック」を短縮して「パニク」がつくられ、さらに動詞化接辞の「る」が後接してつくられたものであると考えている。

また、堀尾 (2022: 27) は、動詞化接辞「る」によってつくられた新しい動詞について、(3) のような考察および分析をしている (原文は縦書き)。

- (3) 動詞化接辞「-る」によって作られた動詞は、いわゆる「五段動詞」、例えば「歩く」と同じような活用をする。「告る」を例に挙げると「告らない・告ります・告る・告れば・告ろう」となる。「一段動詞」である「食べる」などの動詞と同じ活用はとらない。そのため、新し

## 第 11 章

# 形容詞語幹をつくる接辞 k について

### 11.1 はじめに

いわゆる若者言葉の中には (1) や (2) のようなものがよくみられる。

- (1) キモい      (気持ち悪い)
- (2) エモい      (エモーショナルな、感傷的な)

(1) の「キモい」は、「気持ち悪い」という意味である。文字列と意味から考えて、「キモい」は「きもちわるい」の「きも」の直後に「い」が付いてできたことばだと考えられる。このように考えると、この「い」は前接することばを形容詞にする働きをもつと考えられる。また、(2) の「エモい」は、「エモーショナルな」という意味である。これも文字列と意味から考えて、「エモい」は「エモーショナルな」の「エモ」の直後に「い」が付いてできたことばだと考えられる。この「い」もまた前接することばを形容詞にする働きをもつと考えられる。

しかし、もし前接することばを形容詞にする働きをもつのが「い」だとすると、(1) と (2) をそれぞれ過去形にした (3) と (4) はどう考えたらよいのだろうか。というのも、(3) と (4) には「い」が含まれていないのにもかかわらず形容詞だからである。

- (3) キモかった

## 第12章

# 「イ脱落現象」再考

### 12.1 はじめに

口語では「飲んでいる」というところを「飲んでる」というように「い」を脱落させて発音することがある。このような現象は「イ脱落現象」とよばれ、すでに畠山・本田・田中(2015)の第6章「日本語の「い」脱落と英語の wanna 縮約」で詳細な検討がなされている。

まずは、「イ脱落現象」の特徴をみていくことにする。次の例をみてみよう。

- (1) a. 飲んで-い-る。  
 b. 飲んで- $\phi$ -る。

(1a) は、動詞のテ形「飲んで」と補助動詞「い」と現在時制「る」によって構成されている。(1b) では、そのなかの「い」だけが脱落している。一般的にイ脱落は、(1a) のような《動詞のテ形と補助動詞の「い」が隣接している環境》でみられる。たとえば、次の(2a) のように動詞のテ形と補助動詞の「い」の間に「さえ」などが入り、両者が隣接しない環境では(2b) のようにイ脱落は起こらない。

- (2) a. 飲んでさえいる。  
 b. \*飲んでさえ $\phi$ る。

## 第13章

# 日本語の指示詞「こ」「そ」「あ」再考

### 13.1 はじめに

これまでの日本語の指示詞の研究においては、「こ」が《近称》(以下《近》)を表し、「あ」が《遠称》(以下《遠》)を表しているといわれてきた。<sup>1</sup> とくに「こ」は、この形がプリミティブ(最小単位)であると暗黙のうちに仮定されており、それ以上分解されることはなかった。しかし、本章では、《近》を表しているのは「こ」全体ではなく、「こ(=[ko])」のうちの[o]の部分のみであると主張する。この分析をとると、《近》と《遠》のより本質的な対立は、これまで考えられてきたような「こ」と「あ」の対立ではなくて、[o]と[a]の対立ということになる。では、「こ(=[ko])」から[o]を取り去った後に残る[k]とはいったいなんだろうか。本章では、「こ」と「そ」を比べることにより、「こ(=[ko])」の[k]は《話し手》を表す形態素であるのに対して、「そ(=[so])」の[s]は《聞き手》を表す形態素であると主張する。このように、日本語の指示詞の体系では《近》と《遠》の対立と《話し手》と《聞き手》の対立が重要となってくる。そして、この2種類の対立から日本語の指示詞「こ」「そ」「あ」の体系が浮かび上がってくる。

---

1 指示詞の用法には「現場指示用法(あるいは「直示用法」)」や「文脈指示用法」などがあるが、本章は「現場指示用法」のみについて議論する。

## 第 14 章

# 連体詞「ある」と日本語の単数形

### 14.1 はじめに

(1) の「学生」は、学生が 1 人だけという解釈 (単数の解釈) と 2 人以上という解釈 (複数の解釈) のいずれも可能である。<sup>1,2</sup>

- (1) 学生が来た。
- (2) a. 学生が来た。彼は 1 年生だ。
- b. 学生が来た。彼らは 1 年生だ。

このことは、「学生」が男子の場合、代名詞の単数形の「彼」で指せる (= (2a)) だけでなく、複数形の「彼ら」でも指せる (= (2b)) ことからわかる。しかし、下の (3) のように「学生」に接尾辞の「たち」がつくと、単数の解釈ができなくなり、複数の解釈しか許されなくなる。

- (3) 学生たちが来た。
- (4) a. 学生たちが来た。\*彼は 1 年生だ。
- b. 学生たちが来た。彼らは 1 年生だ。

(4a) では「学生たち」を単数形の「彼」では指せないことが示され、(4b)

1 定性 (definiteness) の観点からいうと、(1) の「学生」は単数の解釈と複数の解釈いずれにおいても不定 (indefinite) である。

2 日本語の単数形と複数形については、第 8 章も参照。

## 第15章

# 金田一（1950）再考

### 15.1 はじめに

金田一（1950）は、アスペクトを表す「ている」が動詞に後続できるかできないか、あるいは動詞に後続できる場合には「ている」がどのような意味をもつのか（以下「ている」テスト）を手掛かりにして、日本語の動詞を大きく4種類に分けた。その4種類とは、状態動詞（「ある」、「できる」、「切れる」など）、継続動詞（「食べる」、「飲む」、「笑う」など）、瞬間動詞（「死ぬ」、「消える」、「届く」など）、第四種の動詞（「そびえる」、「すぐれる」、「ありふれる」など）である。

「ている」は動作が継続中であることを表したり、動作の結果の状態を表したりすることから、動作の終点の前後にかかわるアスペクト形式とよぶことができる。「ている」に対して、動作の始点の前後にかかわるアスペクト形式に「かける」がある。本章では、「かける」が動詞に後続できるかできないか、あるいは動詞に後続できる場合には「かける」がどのような意味をもつのか（以下「かける」テスト）も手掛かりにして、日本語の動詞の分類を考察する。

金田一（1950）の分析に対して、さまざまな反論や議論があった（藤井（1966）、高橋（1969, 1976）、鈴木（1972）、吉川（1973）、奥田（1977, 1978, 1979）、小矢野（1982）、Jacobsen（1991）、工藤（1995）など）。しかし、管見の限り、「ている」テストと「かける」テストの両方に基づいて動詞を分類





## 第16章

# 使役を表す「受動文」\*

### 16.1 はじめに

影山 (2009) は、受動文における動作主指向副詞「on purpose / わざと」の解釈に関して、日英語には興味深い違いがみられると指摘している (影山 (2006) も参照)。

- (1) John was hit by the truck on purpose.  

- (2) ジョンはわざとトラックに追突された。  


英語は、(1) の矢印で示されているように、on purpose は by 句にある the truck と関係している。つまり、(1) は「トラック (の運転手) が意図的にジョンに追突した」という解釈になる。一方、日本語では、(2) の矢印で示されているように、「わざと」は主語の「ジョン」と関係している。つまり、(2) は「ジョンは自ら意図的にトラックにぶつかった」という解釈になる。このように、日英語では、受動文において動作主指向副詞と関係する対象が異なる。影山 (2009: 78) は、(2) はたとえばジョンが「保険金をとるために自らぶつかった」という解釈を表すということも指摘している。

上でみた影山による (2) の観察およびその解釈は、一般的に受動形態素と

\* 本章は畠山・本田・田中 (2019) を改訂したものである。

## 第17章

# 「のなんの」構文の認可条件について

### 17.1 はじめに

日本語には (1) のように文末に「のなんの」がつく表現がある。

- (1) a. うれしいのなんの。  
 b. カレーを食べるのなんの。  
 c. 走るのなんの。

(1a) は「とてもうれしい」という意味を、(1b) は「たくさん食べる」という意味を、そして (1c) は「すごく走る」という意味を表している。このように文末に「のなんの」がつくことによって「量や程度が著しいこと」が表される。以下では、(1) のような構文を「のなんの」構文とよぶことにする。

「のなんの」構文の適用範囲は以下にみられるように非常に広い。

#### (2) 形容詞

- a. うれしいのなんの。 (= (1a))  
 b. かわいいのなんの。  
 c. きたないのなんの。  
 d. ずるいのなんの。  
 e. 長いのなんの。

## 第18章

# 「何がXだ」構文

### 18.1 はじめに

これまで日本語の強調構文は、(1)のような分裂文を中心に分析されてきた(Kuroda (1992)、Matsuda (1997)など参照)。

(1) 太郎が食べたのはリンゴだ。

分裂文は、基本的に前の文を受けて使われるため、会話の冒頭で使われることはほとんどない(井上(2009))。そのため、(1)の分裂文は(2)のような文脈で使われるのがふつうである。

(2) A: 太郎はバナナを食べたらしいよ。

B: はあ? 太郎が食べたのはリンゴだよ。(cf. (1))

(2B)の分裂文では、(2A)の「バナナ」が否定され、「リンゴ」であることを示すために「～のはXだ」のXに「リンゴ」が置かれている。これを図示すると次のようになる。

(3) 太郎が食べたのはリンゴだ。 [分裂文の形]

X

つまり、この(3)の分裂文には、以下の2つの機能がある。

## 第19章

# 「方をする」構文と身体属性構文

### 19.1 はじめに

動詞「する」は、たとえば、「テニスをする」の「テニス」や「勉強をする」の「勉強」のように目的語に名詞句をとる。「する」がとることのできる名詞句は多岐にわたるが、そのなかでもとくに興味深いのは、目的語にとる名詞句が「動詞の連用形+方」の場合である。次の例をみてみよう。

- (1) a. あきは変な走り方をする。  
 b. ひで子は面白い笑い方をする。

(1a) では、「する」が「変な走り方」という、「動詞の連用形+方」を目的語にとっている。同様に (1b) では、「する」が「面白い笑い方」という、「動詞の連用形+方」を目的語にとっている。<sup>1</sup> (1a, b) のように動詞「する」が「動詞の連用形+方」を目的語にとっている文を《「方をする」構文》とよぶことにする (藤巻 (2020) 等参照)。

「方をする」構文については、すでに藤巻 (2020) 等で詳細な観察がなされている。本章では藤巻 (2020) の観察も踏まえながら、別の角度から「方をする」構文の特性を捉えていきたい。なお、「方をする」構文は影山

1 「月の満ち方／箸の使い方」などの名詞化接尾辞の「方」を分析した研究としては、影山・柴谷 (1989)、Sugioka (1992)、影山 (1993) などがある。本章では、名詞化接尾辞の「方」については扱わない。

## 第20章

# 英語の *to think that* 構文と 日本語の「とは／なんて」構文\*

### 20.1 はじめに

英語の *to* 不定詞節は、それだけでは通常独立した1つの文とはならない。しかし、*to* 不定詞節だけで独立した文になる場合がある。次の例をみてみよう。

- (1) a. To think that he should be so mean!  
(彼があんなに卑しいとは(驚いた)。)
- b. To think that she could be so ruthless!  
(彼女があんなに冷たいとは(驚いた)。)
- c. To think that they would turn me down!  
(彼らが私を拒むとは(驚いた)。) (Quirk et al. (1985: 841))

(1a-c) で示されているのは *to* 不定詞節だけである。しかし、英語の母語話者はそれらを *to* 不定詞節だけが現れた「文の断片」として捉えているのではなく、独立した1つの文として捉えている。日本人にとって (1a-c) のような英文はとても奇異に感じられるかもしれないが、実は、あとで詳しくみるように、日本語にも (1a-c) に相当するような例があるのだ。(1a-c) のような英語の例は、日本語だけみても気づかない日本語の例に気づかせて

---

\* 本章は Hatakeyama, Honda & Tanaka (2022) を改訂したものである。

## 第21章

# 「この本は売れない」の 曖昧性をめぐって

### 21.1 はじめに

(1) の「この本は売れない」という文は曖昧で、《可能》の解釈 (= (2)) と《自発》の解釈 (= (3)) の2つの解釈がある。<sup>1</sup>

- (1) この本は売れない。
- (2) この本は売ることができない。 《可能》
- (3) この本はまったく売れない。 《自発》

つまり、(1) には (2) のように言い換えられるような《可能》の意味と、(3) のように言い換えられるような《自発》の意味の2つの意味がある。<sup>2</sup> この曖昧性は21.2節でみるように、動詞「売れ」に2種類の構造があることによる。「売れ」の構造分析のなかで《可能》の意味を表す形態素 *re* が仮定されるが、その *re* はいわゆる「ラ抜きことば」でも用いられていることを21.3節で示す。最後、21.4節で本章をまとめる。

1 文の曖昧性については、第22章のほか、畠山・本田・田中 (2015) の第16章「『太郎は花子のように英語ができない』の曖昧性」および同書第17章「『ゴミ箱がいっぱいだ』の曖昧性をめぐって」も参照。

2 「売れない (売れません)」は実際には《不可能》を表すが、このような「売れ」も本章では便宜上《可能》として分類する。

## 第22章

# 「酒を飲んで運転した」の 曖昧性をめぐって

### 22.1 はじめに

(1) の下線部 (= テ形節) は、(2) のような継起の意味にも (3) のような付帯状況の意味にもとれる曖昧表現である。<sup>1</sup>

- (1) 酒を飲んで運転した。
- (2) 酒を飲んでから運転した。 [継起]
- (3) 酒を飲みながら運転した。 [付帯状況]

しかし、(1) のテ形節に (4) や (5) のように副詞が挿入されると曖昧性が消える。

- (4) 酒を5合飲んで運転した。 [継起] [\*付帯状況]
- (5) 酒をちびりちびり飲んで運転した。 [\*継起] [付帯状況]

(4) は継起の解釈 (= 「酒を5合飲んでから運転した」) は自然だが、付帯状況の解釈 (= 「酒を5合飲みながら運転した」) は不自然である。(5) は継起の解釈 (= 「酒をちびりちびり飲んでから運転した」) は不自然だが、付帯状況の解釈 (= 「酒をちびりちびり飲みながら運転した」) は自然である。

1 文の曖昧性については、第21章のほか、畠山・本田・田中(2015)の第16章「「太郎は花子のように英語ができない」の曖昧性」および同書第17章「「ゴミ箱がいっぱいだ」の曖昧性をめぐって」も参照。

## 第23章

# 日本語の文法現象と第二言語習得

## —母語の文法を実感すること—\*

### 23.1 はじめに

教室で学生に英文法を明示的に教えることの重要性は、白畑(2015)において、周到な実験とその実験結果の綿密な分析に基づいて主張されている。筆者らもこの考え方に大いに賛成なのだが、「英文法を学んでも英語が話せるようにならない」という声も聞かれるし、さらには「母語である日本語は文法など学ばなくても話せているのだから文法は必要ない」といった意見もある。しかし、このような意見には「大きな勘違い」がある。それは、母語の文法は「知らないうちに」脳の中に入っているということだ。つまり、母語話者は意識しなくても文法は頭の中に「リアル」にある。言い換えれば、言語をマスターするには文法は必要なのである。このことがわかってはじめて、英文法を明示的に教えることの重要性が理解できる。

本章では、母語である日本語を取り上げ、身近な例を使って私たちの頭の中にある具体的な文法を示すことにする。そうすることで、日本語の母語話者は、《無意識に「文法」を知っている》ことが「実感」できるはずである。さらに、《無意識に「文法」を知っている》という事情は英語でも同じであることに気づかせてくれるはずだ。すなわち、英語の母語話者は無意識に「文法」を知っているから英語を話せるのであり、文法を知らなければ母語

---

\* 本章は畠山・本田・田中(2023)を改訂したものである。